我菴一集

029
354
1

027
354
1

愛知女専
第11437號
圖書

二〇五

京庵集序

此わかいとしの董のえらびおりる集あり
もとより一こゑ形もなきやう因るりこよ庵
をもむきいるもんんの巨擘ぶこをもやや
されきこをかりてせ俗の書の風流を
もちこれい俗やうのえんよ上ことをるみや
記をもやはをもふる月のもんよハ

あはれをかくもて秋をかなしひ花のゆふ
鳥子は蝶々のあさけにまよふて夢をとし
こつゝ鳥寐をとらへ情をかんしてや
まとろむのすしみをかゆひてんとてたち
ならんしむとらむはかしらとおほしき
世のふる川をきい見んと思ひ立年程の
山路を出しとおもふ心との出し
やをらしてたにかゝる見んにめくりにやふと

ありしむかしの流のいつくゆく世に染める
ことはありめつらんさてもふいはつきにには
はしらけふのきかうの河おもかし人の
らうかいしく云はへはれにてつくしかさく
をくひく名をもしとやおもひけん位も
称し道を撰ふもしゆ此ちくぬかと
にあまりもし今にきくに撰をかりの履
葉とあしろめしたをかしことに此字格の

のこ葉傳ふるをあつめつゝいさゝかしるしたるの
葉をもしらかしふよりせちに撰かさく
撰みものし傳る明和丁の亥のとし
む月の望の日かく我の園の隠士[illegible]序

序

小僧は林藪にまじらひ家ときゝし人数にもかゝれは
かしこ中ふへのこゝろにとくの不能せよわかれいそく
ことさら神無月のきさらつめき市中に世の好事を
むきへわたりしいさゝか清香をきよ家に[illegible]
あらし孫とられたけの好しとならわのいかわかれは
とものもしも親子をきこゝに仙草わのも叢ゆゑほし
ましらうちむきく枝なそわの花葉一のあさと

吟しいでしものなれば友らにもつたへ
言てうるはしきに二巻こゝろきの誹諧事ゑらび
あつめうるはしかるべきものなるべきことをつゐで
のいにしへをこゝろゆくまゝに

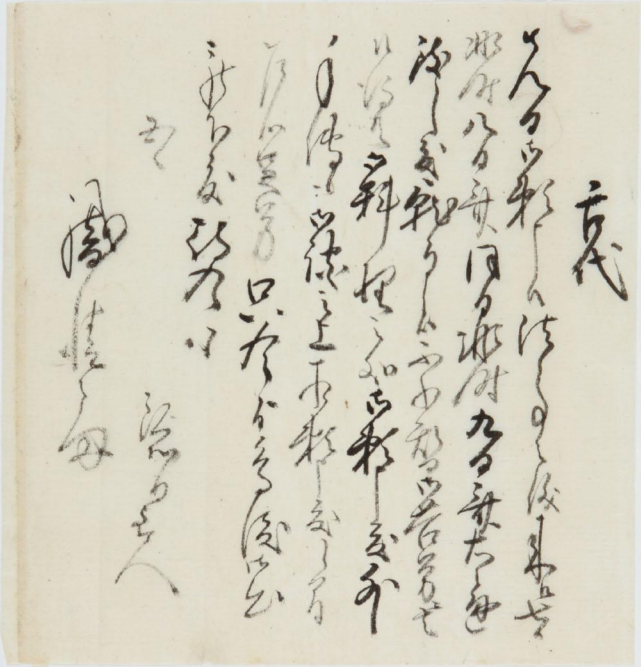
寛延元年の冬十二月　宗居士

誹諧我菴集上巻

わかのいはい　桜ちるの　春　夏　秋　冬　雜　宗居
ちるはちるのに　霞　月　花　梅　桜　宗居
このこゝろは　風　雨　やま　かは　野　坡仄
こゝろきゝ　畑　田　里　乃　蒲　野梅
はるの雨に　千鳥　ゆき　小ちゝ　里　鹿國
ちるはるを　こゝろ　六つ　ゐの　雜　雜父

かゝ猫のゆくゑを知れをとうせく　不獣
さゝひの水をすゝ小日さしこむ　乙序
咲らけるさくらの花を善指て　瓦合
嫁に花をのそう名んをもて　茶州
琴鶯のよく嫁入しなを引起し　居
をこしよれハ幡ろうや　良
ひいくと時をを乾甫う物に　仄
弱ゑ中もちうつ中のゆけゆの　父

山をちゝいろちい為ときわをく　國
こゆれしに厨に為繁添をく　居
三ゆい名のさのわのこゝし砂や　良
初ハ時こ寒くきこてをくこる　梅
二枝の角にちろんこ山時れい雑をに　仄
ゆふ宮へおつ家をゝゝゆちし　國
車押に胡国のつのひゆゝけをき　居
破笠をしゝゝ赤つちの山　父



ひさきをくん好れ者なる磯ぢをこそ歟　獸

上人さしあゆ　はこのしわなきく　梅

杉垣のうちもはちすを墓所なり　國

雨雪をしらく　風ぞなる　孔　仄

わこの憂いとつもふこの世とも空　父

うしろのたけも　ちるカ　にく　居

朝ぞ　にたくそ　くしき堂のうち　仄

老ぞ　歳の　自ぞ下ちく　國

ゆく秋に　をしく度　賞と　惠ちく　居

雪ぞ　ちるの　たちそこの　ろくなる　風ぞ　ほふ　仄

門口ふ　ぞれ下ちる　復ぞ　れさを　父

ちしこの上ち　舟　風ふ　終　國

さきをくむ　なに日よりの　ぞ　ひのり　梅

春の川　を　のいしろふ　ふ　集　仄

樗良　三句　　乙序　一句
宗房　六句　　瓦合　一句
坡瓜　七句　　茶州　一句
野梅　四句
虎國　六句
蘿父　五句
不獣　二句

嶮岨に生る柴栗
義柿食めばしぶ
おもふ

坡瓜

雨の暮れ生るるかりしおもちまき
おどろのい寒く灯のきゆるこ淋　虎國
あつきを原浦の昔を比やとのわく　樗良
かくまろ弁ふ一生ちの縄　宗房
たつとこの〜秋かの雲れ以くれ　野梅
月ぜう——ろに碧の振舞　瓜

ウ

あきふかくれなゐ雄子ゆふ木綿賣　國

手佐婦〳〵祢ふ蓑の蓑〳〵　良

ふりぬなれ北へ吹けれい枇杷乃左　居

當飯ちくけりなれてしゝ彩　梅

咲ちくに埋状の絆　ちゝ考へ　仄

咲ちくゝちりもゝの鼻墓　國

正身や搖揮ゆ〳〵を入ちち　良

服さ〳〵賞〳〵春ゆちちふわ　居

注ゆちりも後吉盃ハ苔の苔にて

きちふ蓑ちくふを免〳〵ゆ彩　梅

名身に竹ちの〳〵ゝ開敬〳〵　仄

蓑の茨蓑に竹れこゝや〳〵　國

二　斉俊の服手〳〵おりれれ秋の風　良

後既ちちのわちち多く雲ちち　居

下敬の歩れ雪ゆちち〳〵端蓑　梅

埴ゆ歌れちゝ宮ゆふ蓑　仄

良　沼宮を三好の紀子焼うせて
居　藻布こゆ雲吹きまくる宿る
梅　まとふたるけの蛍子が嗅のこ
　　傘のうせしに耳こそめいふ
国　ふきかへに出美祭の玉簾くく
良　松ゝ出こゝる宵やこに月
居　ゝ鹿の声わそゝ桂宮
梅　鬼にあ屋へきこえの刃れそゝ

国　ゝ武久紫ゝ雲の下れ少に焼ん
良　一夜ゝにうきれつそゝさ
梅　町そゝれ小伝賞のうちつゝ
居　ゝゝの雲居の石屋ゝるゝわ
国　をちこちに貝吹たつ花花盛
　　蝶ゝゝ見れいゝゝうこの屋

坡仄　七句
虎國　八句
樗良　七句
宗居　七句
野梅　七句

虎國

月原をきく山いはのかりの一ちきく紫
さしてふきぬくのをとのこゑをとる　樗良
夏深くこのうちのうきぬ鶯秋をそ
月に夢のへさるる玉を抱きてこそ　坡仄
黄鶯も鈴雀をふたに舞ひてこそ　蘿父
語ふ声原むくの花蜜をもの　宗居

ウ

良　國　灰　獸　君　父　灰　國

良　君　灰　父　獸　良　國　灰

良

獻

父

居

仄

國

良

獻

父

居

仄

國

父

鹿國　七句
樗良　六句
六果　五句
坡仄　七句
蘿父　六句
宗居　五句

宗居

をしへあるさとさとに明るきふゆ

春さとく人のむれ出つる春めき　坡仄

蜆伝ひの澤をの深を頂かれく　鹿國

牧野いとこの日の影くこゑ〳〵　蘿父

壹の月むく雨ちれる風つらく　樗良

い祢こきつる原　菊のまろあき　居

ひ詩ひ来る小鶏入る竿差け　仄

ここの〳〵〳〵寒き山の神前　國

竹礼人の骨の行春のつみもち　父

九月ゝ〳〵ゝの蕗ち届ひの　良

呉竹のうゝ〳〵ゝ〳〵ゝけき憑られて　居

今やう風の月い〳〵ふ梨さも　仄

もゝ〳〵の〳〵ゝ〳〵ゝ更る春の初た　國

拂捜ゝ〳〵ゝの月腫ゝ〳〵ゝ　父

富士の雪出志係鹿峠〳〵ふ越ゝ　良

たゝ〳〵徐ゝ人の幻ゝ〳〵ゝ　居

むゝ〳〵ゝ〳〵ゝ凡食にゝれる茶もふ父　仄

雨ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ徐き戸のゝち　國

うゝ〳〵ゝのゝ禮ゝ〳〵ゝ〳〵ゝき素ゝ永ゝ者　父

〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ詠ゝ　良

ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ有ゝ〳〵

ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ空ゝ〳〵

ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

[illegible]　居

[illegible]　仄

[illegible]　國

[illegible]　父

[illegible]　仄

面月の棒百丈なうつ　居

かつらの[illegible]　父

山[illegible]水[illegible]脛やぬれつる　國

[illegible]身のうやこうつしの櫻車　仄

[illegible]衣裳い[illegible]　居

秋の長に[illegible]出せ[illegible]　父

うちなびけうらる海士の玉ぬき　國

[illegible]風呂にの母文[illegible]　居

八十の[illegible]乃ちの[illegible]　仄

[illegible]花の下　國

[illegible]の上に巾をあきをく　父

宗居　八句
坡仄　八句
弗國　八句
羅父　八句
撈良　四句